

カスピ海の水位低下

「世界最大の湖」であるカスピ海(もともと外洋とつながっていた塩湖)は歴史上、常に水位の上下変動を繰り返しています。記録に残る過去では、最低水位は 10 世紀の海拔－35m、最高水位は 16 世紀及び 18 世紀の海拔－22m です(水面は常に外洋より低い)。

近年の水位の変動を見ると、1930～1977 年に 3m 低下(海拔－29m)、1977～1995 年に 2.5m 上昇(海拔－26.5m)、その後低下が始まり現在水位は海拔－28m です。2021 年には年間 30cm という近年最高の水位低下を記録しました。

カスピ海の水位変動は主に河川流入量、降雨量、海面蒸発量に左右され、多くの専門家は水位変動に関する長期的予測は容易でないと語っています。ただし地球温暖化が進めば海面蒸発量が増えるためその分水位低下が進むと考えられ、ドイツとオランダの研究者の論文によると、カスピ海の水位は今世紀末までに、パリ協定による加盟国の温室効果ガス削減義務が履行される場合には 9m 低下、そうでない場合には 18m 低下が予測されるということです。

水位低下が続く場合の影響はどうでしょうか。

専門家によれば、まず、水深の浅いカスピ海北部が干上がり海岸線が変化し、アストラハン、オルヤ(露)等の港湾アクセス、ボルガ・ドン運河での輸送、北部油田の原油生産・輸送で問題が生ずると見られています(アクタウ、クリク(カザフスタン)、アラト(アゼルバイジャン)等のカスピ海中部、南部の港湾は比較的影響が軽微)。

このほか、水位低下による沿岸景観の毀損、インフラへの影響(実際にアゼルバイジャンの火力発電所ではカスピ海からの取水で困難に直面)、生態系への影響(貴重な魚類など希少生物の絶滅危惧、生物多様性の減少、渡り鳥の移動への問題等)が懸念されています。

専門家は、カスピ海の水位変動は基本的に自然現象であり、人為的な防止措置は難しいが、カスピ海に関わる政府、産業などすべての当事者が、今後予想される水位変動(低下)への対策を考えるべきと指摘しています。

(以上)